

## 柏木智子・仲田康一編著・『子どもの貧困・不利・困難を越える学校』・学事出版（2017）

大林 正史

鳴門教育大学 moobayashi@naruto-u.ac.jp

本書は、「小・中・高の教員，学校事務職員，スクールソーシャルワーカー，地域住民，研究者というさまざまな立場から日々貧困問題に取り組んでいる面々」が、「自身の編み出した実践や参与してきた実践についての具体的内容を，それぞれの視点からわかりやすく描い」（4頁）たものである。子どもの貧困対策法が成立し，学校に子どもの貧困対策が求められる中，「子どもの貧困問題に何らかのアプローチを試み，ケアする学校文化，地域文化を創造しようとする先駆的な取り組み」（20頁）の記述を通して，子どもの貧困問題の解を導く「ヒント」の提示を試みた本書が出版されたことは意義深い。

序章では，子どもの貧困・不利・困難の実態と理論的背景が説明されている。「経済的困窮に保護者の様々な困難要因が加わり，それらが社会的支援によって解決されることなく蓄積された結果，不利や困難が重複して子どもに現れる」（14頁）ことや，「様々な背景を有する子どもを一括りに扱い，集団としての活動を基軸に，そこへの同調を明示的・潜在的ルールとして定める」従来の学校では，「様々な不利や困難を抱える子どもたち」が排除されること（16頁）が指摘されている。また「排除の文化に陥りがちな学校」（17頁）から，「子ども一人ひとりのウェルビーイングを目標に，それぞれの『生』を支える総合的な働きかけや発達保障に取り組む」「ケアする学校」（18頁）への変容の必要性が論じられている。

第1部では，貧困・困難・不利に立ち向かう学校の実践が記述されている。第1章では，生活が厳しく，低学力で自己肯定感を持ってない児童が，職業体験での「本物の体験」を通して，その自己肯定感を高めた事例が記述されている。第2章では，住んでいる町に対してネガティブなイメージをもっていた児童が，授業の中で地域の歴史や良さを住民から聞き取り，発表することを通して，地域に対して良好なイメージを持ち，自尊心を高めた事例が記述されている。第3章では，社会経済的背景が厳しい生徒が多く通う高等学校において，教職員が「貧困を越える」という理念のもとに，総合的な学習の時間で，世界や日本の貧困の実態や，自分が貧困に陥ったときの対処などを学ぶ「貧困を越える学習」を実践したことなどにより，就職率が上昇してきた事例が記述されている。第4章では，「あいさつ運動」により，学級であまり目立たない子どもたちの自尊感情が高まったことなどが記述されている。

第2部では，包括的支援を可能にする学校と福祉・行政の連携事例が記述されている。第1章では，足立区の施策の特徴として，「『子どもの貧困対策』に対して教育部局だけでなく首長部局が積極的に関与し，しかも全庁的な施策を包括的に行っている点」，「これまで行ってきた施策を子どもの貧困対策の観点で体系化し，発展させている点」（83頁）が挙げられている。第2章では，家庭教育支援チームによる全戸訪問型アウトリーチ支援などにより，養育が困難な保護者とその子どものエンパワーに成功した事例が記述されている。第3章では，教頭が，養育が困難な保護者とその児童を，担任や養護教諭，市の児童福祉課や児童相談所などと連携しながら，継続的に支援してきた事例の経過が記述されている。第4章では，埼玉県の4市の学校の保護者負担金が公費負担分の5～10倍であり，その支出額の自治体間の差が大きいことや，学校事務職員による私費負担を減らすための工夫などが記述されている。

第3部では、多様な課題を抱える子どもをエンパワーする学校と地域の連携による活動が記述されている。第1章では、社会経済的背景が厳しい生徒が、ストレス・マネジメント学習などによって、周囲の生徒と人間関係を築いていった経緯が記述されている。第2章では、隠岐島前高校において、生徒が地域の問題を発見し、その解決策を立案、実行することを通して、「自分たちの行動が小さくとも社会に変化を生む」(134頁)ことを学んだ事例などが記述されている。第3章では、“しんどい思いを共感し、学習の基礎、基本の定着をめざす”土曜教室において、大人との一対一での学習によって、「しんどい子ども」が自己肯定感を獲得し、学習に対して前向きな姿勢を持つようになった事例が記述されている。

終章では、「子どもの貧困対策として学力対策を行うことで、学力による格差化という既存の学校秩序は、本質的なところでは傷つくことなく維持される」(154頁)ことや、「貧困自体が問題」(156頁)であり、それ自体が解決されるべきであること、本書で記述されている「民間・地方の実践が、国が十分な対策をしない口実となってはいけない」(同頁)ことなどが指摘されている。

以上の内容から、評者が考える本書の主な意義として次の2点を挙げたい。

第一に、本書では、貧困・不利・困難を抱える児童生徒がケアされることにより、社会に包摂されることをめざした、日本における多様な学校運営や教育実践、教育と福祉の連携活動が具体的に記述され、それらの実践がどのような意味を持つのかについて学術的に論じられていることに意義が認められる。従来「効果的な学校」研究では、本書と同様に、社会経済的背景が厳しい児童生徒が多い学校における学校運営や教育実践、地域連携活動が着目されてきた。しかし、そうした「効果的な学校」研究では、主に児童生徒の「学力」を高めることに関心が注がれてきた。それに対して、本書は、貧困や不利、困難を抱える児童生徒がケアされることを通して、社会に参加できるようエンパワーされることに関心を注いでいる。そのような関心のもとに、学校運営や教育実践、教育と福祉の連携活動の具体的な実践が記述された書籍は、管見の限り、これまでほとんど出版されてこなかったように思われる。

第二に、本書は、大学における教員養成課程の教科書としても有用な点に意義が認められる。本書の理論や実践事例は、教職課程コアカリキュラムにおける「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項」で示されている教育制度、学校安全、危機管理、学校経営、地域連携の各領域に関する内容を含んでいる。また、事例の記述が具体的であるため、学部生や院生も興味をもって読むことができるだろう。学校に「ケアする文化」を構築していくためにも、教員志望者が本書を学ぶ意義は大きいように思われる。

ただし、評者が考える本書の課題として、次の2点を挙げておきたい。

第一の課題は、社会経済的背景が厳しくない地域の学校において、一人ひとりの子どもの社会的背景に目を向け、その子どものニーズに応じた教育を行う「ケアする文化」を構築する方途を示すことである。本書の事例の多くは社会経済的背景が厳しい地域の学校を対象としていた。本書はそのような地域の学校において、ケアの文化を構築し、子どもの貧困の問題の解を導く「ヒント」を提示することに成功しているように思われる。だが、社会経済的背景が厳しくない地域の学校において、「ケアする文化」を構築する「ヒント」を提示することについては十分に成功しているとは言い難い。そのような地域において「ケアする文化」を構築しようとしている学校を発見することが今後の課題のように思われる。

第二の課題は、社会経済的背景が厳しい保護者が「社会的にも政治的にも声を上げ得るようにエンパワー」(157頁)される方途を示すことである。保護者も、自分が置かれている状況が、ある社会構造の結果であり、その構造を変えることができるとの信念や、その方法を学習することが重要なように思われる。つまり、保護者も、「適応」だけでなく、「抵抗」の力を身につける必要があるのではなかろうか。そうした学習を試みている社会教育実践を発見することも今後の課題のように思われる。

以上の課題は見られるものの、本書は、学校での子どもの貧困対策に関する貴重な実践が多く記述されており、今後の学校を中心とした子どもの貧困対策の実践において必読の書であると言える。